

中世における「外国人」とは

中世日本にも、数多くの「外国人」がやってきた。もちろんさまざまな目的をもって、あるいはさまざまな理由でもって。中世の日本人は、彼らを「唐人」と呼んでいた。外国人＝「唐人」だ。だから、朝鮮人も「唐人」である。近世の人々も、外国人を「唐人」と呼んでいたが、江戸幕府によって髭を生やすことが禁じられた日本人が、みな無髭になると、外国人の髭は際立った特徴となり、17世紀末には「毛唐人」と呼ぶようになる。

では、中世の「唐人」はどんな人々であったのだろうか。

無論、代表的な唐人は、宋人たちであった。中世文化に大きな影響を与えたのは、禅宗の僧侶すなわち禅僧であり、宋（中国）からは多くの禅僧たちが日本へやってきた。来日した代表的な禅僧を挙げれば、建長寺の開山となった蘭溪道隆（1213～78）や円覚寺の開山となった無学祖元（1226～86）がいる。また、東大寺再建に尽力した陳和卿ちんわんけいのような宋の工人もいる。

中世「唐人」の商人たちは、日本列島を股にかけて交易活動を展開していたと思われる。鎌倉後期には、「唐人」の集団が薬や櫛などをはじめとする「唐物」を商っていた。また、内裏近くにも「唐人の類」がいた。室町期には、唐人座があり、有名な陳外郎ちんうらうとその子孫のような、唐人の医者・薬屋の活発な活動が見られた。石工や唐飴売りも、「唐人」であった可能性があると言われている。

14世紀の『大江山絵詞』や『男衾三郎絵詞』を見ると、前者には、宋人の商人たちの姿が描かれており、後者には、山賊たちのなかに、顔や姿の描写からみて「外国人」と思われる男が一人混じっている。他方、蒙古襲来以後に描かれた『聖徳太子絵伝』や『八幡縁起絵巻』などには、鬼のような顔の朝鮮人や蝦夷が描かれており、外国人を鬼のような存在と見る意識が急速に育っていったことを示している。

アイヌ・琉球における元寇

元（モンゴル帝国）は、東アジアのほぼ全域に勢力を拡大していき、高麗やベトナム、チャンパーなどの各地で戦いをひきおこしていった。日本への二度にわたる元寇は、そうしたなかの一つにすぎない。

他方、日本海の北部では、13世紀になると、アイヌ民族が、交易活動を活発化させ、千島やサハリン（樺太）へと進出していった。ほぼ同時期に、アイヌ民族は、本州でも鎌倉幕府と衝突していた。元は、こうしたサハリンでのアイヌ民族の交易活動とも衝突するに至ったのである。

アムール川（黒竜江）下流域まで勢力が及んでいた元（モンゴル帝国）は、アイヌ民族を骨嵬（クイ）と呼び、その討伐を開始した。そのきっかけとなったのは、すでに元に服属していたギレミ人らの、骨嵬が毎年侵入してくるという訴えであった。元とアイヌ民族の交戦は、おもなものだけでも、①1264（至元1）年11月、②1265（同2）年3月、③1273（同10）年9月、④1278（同15）年9月、⑤1283（同20）年7月、⑥1284（同21）年8月、⑦1285（同22）年10月、⑧1286（同23）年10月、⑨1297（大徳1）年5～8月の9回も記録されている。元は、骨嵬の根強い抵抗に手を焼いたが、1308（至大1）年には、ついに服属させることに成功した。アイヌ民族は、年々毛皮を貢納することになったのである。

それに対して、沖縄などの南島では、11世紀前後から、国家形成の胎動が始まり（考古学的には「グスク時代」と呼ばれる）、やがて15世紀には、統一国家としての琉球王国が生み出されるにいたる。元は、そうした琉球へも討伐軍などを派遣したことがわかっている。たとえば、1291（至元28）年には、討伐軍の派遣が決まり、翌年に派遣された。また、1297（大徳1）年には、福建省の使者が琉球に偵察に来て、100人を俘虜にして帰還し、翌年、その俘虜を返還して服属をすすめている。（東京大学名誉教授・立正大学教授・群馬県立歴史博物館長 黒田日出男）